

研究所での学びを語り合おう！

小川 敦嗣 小野光太郎 赤羽 雄太
 福島 章浩 伊藤 葉子 黒岩 誠



共に学ぶ仲間になる 第76期研究員

研究所での
 学びの時間をいただいて

黒岩：私は研究所に来なければ、触れることのなかったかもしれない長野県の教育の歴史を学んで刺激をもらいました。正直、今まで教育というものをしっかり考えたことがなかったけど、教師としてそこに居るとはどうか？とか。新たな世界に触れることができよかったです。

しゃべり出したら止まらない！
 研究員の推薦図書をご紹介！



黒岩研究員推薦：「木のいのち 木のころ天」西岡常一著

福島：そうそう、私たちは教師として知らないことが多すぎたよね。現行の学習指導要領も何か新しいことが出てきたのかと思っていたら、実は過去の先生方の積み重ねによって50年も100年も前から大事だと言われていたことが、ようやく認知されて世の中に出てきたことを知って本当に驚いたよね。

赤羽：僕は教科や学校を中心に考えがちだったんです。美術の楽しさ、面白さ、難しさを越えたところにある喜びを伝えたいと思ったけど、それは大事なことのうちのほんの一部であって。やっぱり、人間って何だろう？とか、人が成長していくって何だろう？とか、発達していくって何？とか。世の中は大きく変わっていくけど、私たちはどういうふうに変わっていけばいいんだろう？とかってことを考えなければいけないなって今は思います。学習指導要領も研究所で学んでから読んでみると、また読み方が変わりました。

小野：今まで自分は学校っていう枠の中だけで考えていたんだけど、自分の頭で、教育って何？学んで何？って考えていたというよりは、学校という社会や仕組みの中で、今までのやり方を踏襲して何となくやっていた部分が多かったんです。でも、研究所に来て教育の世界だけじゃなく、広い世界を見聞きしていく中で「教育の世界に身を置く者として、あなたは自分の頭で考えなきゃいけないよ」と思われたのが一番大きいか。自分では考えてやってきたつもりだったけど、実は「動く歩道（コンベア）」にちょこっと乗っかって、その流れに身を任せていただけだったのかなって。

福島：確かに私は学校にいる時には、一旦止まるという

ことができなかった。一旦止まって景色を見回すとかじゃなくて常に進み続けなければならない。じっくり考えるって至難の業だった。学校では自分で学んだことをすぐに実践として生かせるよさがあるけど、研究所は自分を振り返ってとことん学び直せて、その学びをじっくり溜め込めるっていうのがよさだよな。

小川：「動く歩道」に乗っていたら一と流されていたけど、研究所に来て一旦動く歩道を降りたら、今までの景色がどんなだったかを振り返って見ることができましたね。自分は学校しか知らなくて、自分の受けてきた教育を生徒たちにもやってきたんだけど、活動一つ一つの意味とか深く考えずにやってきて。それでもここまでなんとかやってこられた。でも、今までの延長線上でやったら、子どもたちも自分と同じように考えない人たちになってしまうような気がして…。世の中が大きく変化してきて、子どもたちの未来は私たちが経験したことの無い社会になるんだらうなと考えるみると、僕が変わらないといけないうって思ったんです。子どもたちには自分で考えて歩いていける経験をたくさん積んで、学校を卒業して欲しくて。自分は考えずに、踏襲するだけで歩んでいたってことに気づけなかったから…。研究所に来てそこに疑問を感じることもできた。そういうことすら考えてこなかったから。こうやって考えると大きな転換点だった。180度考え方が変わったもの。



小川研究員推薦：「子どもを「人間」としてみる」佐伯胖他著

福島：一旦「動く歩道」を降りるってことは、「自分を問う」ってことだよな。自分自身や今までの当たり前を一回問うってこと。問いを投げかける。あの景色ってどんなだったっけ？って。それが私たちにとっては研究所で学ぶことだったのかもしれないね。

小川：僕は研究所に来るまで、この「動く歩道」の「乗りこなし方」を教わるんだと思っていたんです。うまく、巧みに乗りこなす技、スキルを身につけるために来たのだと。だから、基本的にこの「歩道」自体は変わらない。「乗りこなし方」だけの話だと思っていました。でも、研究所に来てみたら、そもそもこの「歩

道」が本当に正しいのかってことで「乗りこなし方」とかはどうでもよくなって…。

小野：わかりやすい（笑）

小川：4月に来た時には、うまく乗れるようになろう。だって今までに「動く歩道」の上で何度も転んでいるから。僕には何が足りなかったんだろうって。でも、そもそも「歩道」そのものが違うんじゃないかって…やっぱり根底だと思ふ。「乗りこなし方」っていう「方法」じゃない世界。

伊藤：それは降りなきゃ分からなかった。

小川：そう。なぜなら降りなければずっと乗っているから「乗りこなし方」を考えちゃう。

福島：4月に小川さんは「自分をリニューアルしたい」って言っていたけど、それは「乗りこなし方」を覚えてもらうんだって考えていたんだね。

小川：そう。転んでもいいようにヘルメットを被るとか、自分に足りないパーツを見つけるとか。生徒を指導するコツや能力を身につけるんだと思っていた。

黒岩：私はそもそも「動く歩道」に乗っていても、気になる花が咲いていたら、自分から降りて見に行っちゃうタイプだから、大体みんなが乗っている「歩道」から遅れちゃうんですね。でも、時には降りるってことも大事なんじゃないですか？

小川：これまでは子どもたちを何とか「歩道」に乗せて、寄り道しないことばかり意識してた。今はこの「歩道」から降りて一回立ち止まってみて、子どもと一緒に花を見にいってもいいかなって思う。これまではその「乗っている動く歩道」を疑うことすらなかったから。

小野：自分はこれまで「学校で乗るべきとされる歩道」になんとか違和感をおぼえて、別の「歩道」を見つけたんです。それが生活科・総合だったんです。周りにいた多くの実践家の先生方は、時に苦しみながらも、しっかりと地に足をつけて、子どもたちと一緒に自分の道を自分の足で歩いている先生方ばかりでした。でも、初めての実践に不安を抱いていた自分は、ここでも数々の素晴らしい実践をなぞろうとしてしまいました。でも、それって全然違って、なぞった実践をしている自分は、自分の頭で考えていないし、まさに「動く歩道」に乗って、自分の足で歩いているんだっていうことに気が付きました。



小野研究員推薦：
「ふるさとの大地」
信濃教育会

福島：「動く歩道」に乗っている人と、そのすぐ横を自分の足で歩く人って、一見自分と同じ景色を見ているように見えるけど、自分の足で歩いている人たちは、自分の意思で一旦止まることができるよね。「動く歩道」に乗ってしまうと流れに身を任せて進むだけ。見

ている景色が同じに感じるから、同じことを考え同じようにやれていると思っているけど、実は自分は流れに乗ってただけで、本当の意味で自分の頭で考えてはいなかった。見えている景色も実は違った。自分で歩いている人たちは、何かあった時に自分で立ち止まり、自分を見返し、自分で考え発見し、次の歩み方を考えることができる。私たちは研究所に来て、そのための機会をいただいた気がするね。



福島研究員推薦：
「わかる」ということの意味」佐伯胖 著

研究所での学び ～「仲間」って～

伊藤：私はこれまでの経験や感覚でやってきたことが多くて、自分のやってきたこと

を言語化するのが苦手なんです。自分の実践を振り返ってまとめる時に、これってどういうこと？って毎回迷う。今年はとにかく辞書を引くことが増えたけど、研究所に来て本当の意味で自分のものにしていくためには、言葉にしていくってことが必要なんだなって気づきました。言語化されると自分の中に入ってきて自分のものになっていくんだなって。書いてきたレポートを後になって読み返してみると、そうだ、自分ってこうだったよなって改めて自分を振り返って、自分の血となり肉となるような感じです。研究所に来てよかったなって思います。

小川：文字だけじゃなく、こうやって喋っているのも言語化じゃないですか。研究所の仲間からレポートに対して、ここはどうなの？それはこうなんじゃない？とか言ってもらって、聴いて、振り返って、変わっていくっていうのも大きいんじゃないかな。

黒岩：やっぱり、一人じゃできないですよ。一人じゃなくて、これだけの人数がいて、それぞれにこれまでの歩みがあって。それで研究所っていう交差点に差し掛かったときに、見返すチャンスがあったから学びを実感できていますけど、これ一人だったらどうですか？もし「動く歩道」を降りられたとしても、結局一人でずっと歩いてきた世界しかないから、それだけじゃ「歩道」を降りたことよさには気付けないと思うんです。「一人じゃない」っていうのが研究所での学びのよさだと思います。所長、特任所員、部長からも多くを学べる。いろんな先生たちの授業を参観する機会も希望次第でいただける。同僚の先生に迷惑をかける心配もないんですね。

福島：確かにそう。一人で止まって降りてみたところで、景色を見返してみても、結局その景色を自分だけの価値観で見ているわけだから。学校って、先生と子

どもが密接な関係になるじゃない？それにある意味教室って閉じられた空間だから、そうなると結果的に教師の価値観が強く出ちゃうんだよね。だから自分の成長には今までと違う価値観が入ってくるってことが圧倒的に必要だと自分は思っている。そうなった時に、これだけ違う価値観に毎日触れられて、しかも時間的にもゆとりをもって学べるって、研究所ならではかもしれないね。

赤羽：研究所ならではの言えば、やっぱり「仲間」だと思ってます。「仲間」って言っても、これまでの僕の「仲間観」と違うなって思ったんですよ。出会ったばかりの頃は、お互いのレポートを読み合うときも、自分の尺度で同感的な感じで読んでいた。

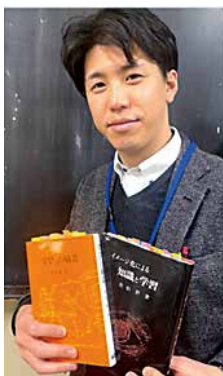
一同：そうそう。「わかる、わかる」ってね。(笑)

赤羽：それって悪いことじゃないんだけど、段々と自分の分身がいっぱいいる感覚になってきました。自分の分身が他に五人いて、自分のレポートを読んでもくれている感覚です。相手の感覚や考え方に想いを寄せて、お互いのことを考えられる仲間になってきていて。それは佐伯所長がおっしゃっていた「その人になってみる」ということが研究員の中で起きてきたんじゃないかなと思ったんです。自分の尺度を一旦捨ててね。だから、指摘された時にも、嫌な気持ちが一切なくて、「よくぞ言ってくれました！」ってありがたい気持ちが何度もしたんですよ。

小野：赤羽さん、何度も「そうなんすよ。そこ悩んでたんです！ありがとうございます」って言ったもんね。(笑)

赤羽：「仲間」としてこんな感覚にもなれるんだなっていうのも、研究所に来て学べたことで、とても大きかったなって思います。

福島：それぞれ学校現場に戻ってもそういう「仲間」になっていけたらいいよね。



赤羽研究員推薦：
「学び」の構造「イメージ化による知識と学習」佐伯胖 著

小野：本当は現場もこういう「対話」の機会がもっとあればいいんですよね。何

で今まで自分は、こういう「対話」をしてこなかったんだろうって思うけど、現場に戻ったらまず自分から大切にしたいなって思うんだよね。

赤羽：先日の苦野一徳先生のアフタヌーンセミナーで「先生たちが対話の機会を大事にしている学校は、間

違いなくいい学校だ」っておっしゃっていて。そういう場をつくることも大事なんだけど、自分がそこにいると自然とそういう場ができる雰囲気みたいなものをつくりたいと思います。

小川：自分の分身ができるような感覚になれるって、時間がすごく影響していると思うんです。それがただでさえ忙しい現場でそういう関係になっていくって難しいと思うんですよね。でも、実習先で出会った先生が、僕が授業や教材研究を楽しそうに自分なりに熱をもってやっていたら、自然と「自分もやってみたいです」っておっしゃってくれたんです。何か相手を変えようとしたわけじゃなかったんですけど。それはすごく嬉しかったです。

赤羽：僕は、先生たちって子どもの姿を通して繋がる関係なのかなって思うんです。だから僕は、子どもたちにまず向かって行って、素敵な姿、芽をできるだけたくさん見つけて、それを同僚の先生と分かち合っていくことが、自分たちに一番できることなんじゃないかなと思います。

黒岩：そこだけは絶対に先生たちって、揃っていますもんね。「子どもの素敵な姿」を見たいっていうのは、絶対先生たち全員にあることだから。

福島：その中で、先生たち自身もお互いをもっと知り合っていくってこともすごく大事なんだろうな。私たちは子どものことをもっと知りたいのと同じように、先生たちもお互いのことを知っていくことで、一緒に子どもたちの成長を願う「仲間」になっていけるんじゃないかな。私たちが4月に、研究所に来るまでの歩みを語り合ったことで、お互いに寄り添う土台ができたと思うんだよね。分身になれる土台。

伊藤：私はお互いが自分の弱みを見せられるっていうことも大事だと思って。同僚の中でダメな自分、弱い自分をさらけ出せるって大事だと思うんです。私が実習で出会った相談室の子たちに対して、教師としての自分や「こうあらねば」とか「こうすべき」を取っ払って、「伊藤菓子」として自然にかかわることで相手が安心してかかわってきけることに気づいたんです。先生たちともそういう「仲間」でありたいなって思いました。



伊藤研究員推薦：
雑誌「信濃教育」信濃教育会

黒岩：研究所に来て、自分たちが感じた「よかったな」という感覚を学校でも感じていけるように、自分に何ができるかを考えていきたいですよ。

福島：でも、あんまり張り切りすぎず、自然体でね(笑)。対話ってやっぱりいいね。座談会、ためになったね～。

これからの私たちが大切にしたいこと